

経済 えひめ流

愛媛大が産業界の要望に応じて研究課題を設定し、地域社会の発展に貢献するため「社会連携推進機構」を設立して8年余り。県内の多くの企業が、機構の仲介で愛媛大の研究者との共同研究や、専門的な助言による新たな商品開発に挑戦し、さまざまな分野で成果を挙げている。

産学タッグ 成果着々

破砕片選別装置改良／農産物加工／微生物で油分解

愛媛大「社会連携推進機構」設立8年

環境関連設備機器製造のダイオーエンジニアリング(四国中央市)は2009年、リサイクル業界が使う廃プラスチック破砕片の選別装置開発に着手した。さまざまな硬さの破片を近赤外線反射と空気の噴射で選別する仕組みだが、製品として求められる精度と処理量を達成できていなかった。改良に向けた助言の依頼を受

企業の商品開発後押し

けた愛媛大大学院理工学研究科の岩本幸治助教(流体工学)は、噴射位置の調節や、破砕片の回転が生む気流が選別精度を下げる点などを指摘。同社は噴射部分やセンサーなどを改良し、選別精度を97.99%に引き上げることに成功した。

田中久喜社長は「付加価値が高い金属などの選別装置の開発も予定しており、今後も相談さ



10種類以上の廃プラスチックを高精度で選別できるダイオーエンジニアリング製の装置。愛媛大研究者の助言で性能を向上させた＝11月26日、四国中央市寒川町

同社はパウダーと塩などを混ぜた調味料や香り付けに使うペーパースト状の商品も販売中。また、県認定漁業士協同組合(宇和島市)とともに、ペーストを混ぜた餌を与えたマハタを独自ブランド「ひめ柑育ち」として養殖し、今秋本格出荷を開始した。他魚種でのブランド化も狙っている。

環境浄化微生物「えひめA1」を製造販売するタオプラニング(松山市)は飲食店などに設置されている、排水から油やごみを集める「グリストラップ(阻集器)」の内部を微生物の力で浄化する製品の開発を目指し、7月から農学部阿野嘉孝准教授(応用微生物学)と効率よく油を分解する微生物を探している。

既に約60種類の微生物を県内

外の土壌などから採取し、うち2種類は培養実験中。堀川勝彦社長は「2、3年後に実用化したい。面白い微生物が見つれば」と期待する。

11年度は機構に約70件の相談が持ち込まれた。県産業技術研究所企画管理部の瀬野英二副部長は、積極的な産官学連携は全国的な流れとし「世界を相手に競争をしなければならず、地域の力を結集することが必要だ」と、愛媛でもさらに産官学連携を加速させる必要性を強調した。(長谷川悠介)